
私立天才高校

一次関数

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立天才高校

【NZコード】

N6318D

【作者名】

一次関数

【あらすじ】

日本中の天才が集まる私立天才高校。この高校の体育から生まれた野球チームのお話。この作品は元々「僕は の天才だ」というタイトルでした。

(前書き)

この作品は、今朝見た夢を参考にしています。

暇だったので書きました。

本当は連載してるのがあるんですが、暇だったので書きました。
ていうか暇だったので書きました。
それを踏まえてどうぞ。

私立天才高校には日本中からあらゆる分野の天才が集結していた。この高校の入学基準は何かの天才であるかどうかである。実際日本を影で動かしているのはこの天才高校の生徒達である。そんなことあるわけがない？否、彼らは天才だから可能なのだ。

天才高校はスポーツ面においてもあらゆる天才が集まっていた。今日はそんな高校の体育教師の物語である。

私立天才高校に勤める井伊世大慶（男）はどこにでもいる普通の体育教師である。ただ一つの個性が男しか好きになれないということである。

彼は今日も考えていた。何故私は女子のブルマ姿よりも男子の靴下跡に目が行くのだろうと。大慶はまだ自分がホモであることを自覚していない。自分が足フェチであること以外に気づいてはいないのだ。

大慶は男子に校庭5周を命じていた。女子は男子がつるさくしていたからだと思っているが、もちろん違う。これは大慶の趣味だ。彼は首から下げた笛を鳴らし言った。

「男子一、ラスト一周！ 気合い入れて走れよー！ 息遣いをしつかりとなーはあはあって！」

息遣い？ 大慶は己の言葉に疑問を持ちながらもしっかりと男子の走る姿を眺めていた。

そんな大慶が選択球技の野球を任せられることになったのは5月初め。ちょうど夏の高校野球の予選受付が始まる頃である。とは言つ

てもこの高校に野球部はない。

生徒全員が天才であるため、練習はあまり意味がないのだ。この高校の校長も部活とかめんどくさいと言つて作ろうとしない。生徒自身もやる気はない。この高校に集まる天才は何故か皆、無気力なのだ。

大慶の元には眞面目とも不眞面目とも言えない、13人の生徒が集まつた。

本音を言えれば、一番男子に人気のあるサッカーを受け持ちたかつたのは彼の心の奥の静かな願いである。

さつそくティー・バッティングでもやってみようということになつた。

全員うまかつた。

ベースランニングを50周することになつた。
全員息も切らさなかつた。

地獄の100本ノックをしようといふことになつた。
全員1球も見逃さなかつた。

大慶は半分みじめな気持になつていた。何故か？全員天才だからである。

大慶は校長に直談判した。甲子園大会に出ようと。彼は上には上がいると言つことを、生徒達に伝えたかつたのだ。

私立天才高校野球部（創立より2時間）は夏の甲子園大会に出場した。

予選大会、空には光り輝く太陽、正面の壇上には光り輝く頭を持つ

たどりかの会長。

開会式が終わると、すぐに試合が始まった。

私立天才高校は優勝した。

彼らは甲子園出場を果たしたのだ。私立天才高校野球部（創立より20日と13時間）は野球をやっている者ならば誰しもが憧れる甲子園の土を踏んでいた。

私立天才高校は優勝した。何故か？全員天才だからである。

井伊世大慶は生徒達から胴上げされた。そして彼はこう思った。

あ、俺ホモだわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6318d/>

私立天才高校

2010年10月9日01時10分発行